

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月25日現在

機関番号：32604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16793

研究課題名(和文)ハーレム・ルネサンス期における性規範の近代化と米国黒人文学の関連性について

研究課題名(英文) Study on the Modernization of the Sexual Norm and African American Literature of the Harlem Renaissance Era

研究代表者

石川 千暁 (ISHIKAWA, CHIAKI)

大妻女子大学・文学部・専任講師

研究者番号：90771387

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は1920-30年代のハーレム・ルネサンス期の黒人文学を対象として、女性の性的経験の表象を歴史的に検証したものである。20世紀前半の米国では、友愛結婚、優生学、社会衛生の言説の普及にとともに、ヴィクトリア朝時代の規範であった「リスペクタブル」(上品)であること以上に「ノーマル」(正常)であることが求められるようになった。本研究はウォレス・サーマン、ゾラ・ニール・ハーストン、ネラ・ラーセンを中心に扱い、そのような規範に文学の女性表象がどう規定されつつ抵抗しているかを詳らかにした。また、その後の黒人作家(とりわけノーベル賞作家トニ・モリスン)の身体表象に影響を与えていることも明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は文学作品に描かれた黒人女性の性的経験を歴史的に検証したものである。20世紀前半のアメリカにおける友愛結婚、優生学、社会衛生の言説の普及にとともに、ヴィクトリア朝時代の規範であった「リスペクタブル」(上品)であること以上に「ノーマル」(正常)であることが求められるようになったが、本研究以前はこうした規範が影響力を持っていたのは白人社会においてのみと考えられていた。本研究は小説における黒人女性の表象に焦点を当て、並行して新聞や雑誌などのアーカイブ調査を行なったことで、黒人社会もまた近代の性規範の影響のもとにあり、その上で独自の表現が模索されていたということを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study gives historical accounts for representations of women's sexual experiences in African American novels of the 1920-30s, an era also known as the Harlem Renaissance. In the early twentieth century United States, the modern idea of normality became a standard for people's understanding of the human body including its sexuality, though not entirely replacing Victorian respectability. This study explores how such modernization influenced the representation of black women's sexuality in the works of African American authors of this era, especially Wallace Thurman, Zora Neale Hurston, and Nella Larsen. This study also suggests the impact the Harlem Renaissance literature had on later authors, including the first African American Nobel laureate Toni Morrison.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：黒人文学 アフリカ系アメリカ文学 セクシュアリティ 女性 友愛結婚 ハーレム・ルネサンス ネラ・ラーセン トニ・モリスン

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ハーレム・ルネサンス期と呼ばれる 1920～30 年代に書かれた黒人文学は、非規範的な親密性のあり方を模索した作品が多いことで知られているが、再生産の役割を担うジェンダーであるがゆえに取り締まりやハラメントの対象となることの多かった女性の経験がしばしばこの時代の黒人文学のテーマとなっていたことは先行研究によって説明されていなかった。研究者は女性のセクシュアリティ表象に焦点を当てたそれまでの研究を通して、友愛結婚が象徴する性的正常さの概念の規範化が、産児制限を推奨する優生学と強い結びつきを持っていたこと、また、規範から外れた性のあり方を取り締まる社会衛生運動の言説と表裏一体であることを強く意識するようになった。そのため、優生学と社会衛生運動の歴史にも目を配った上でハーレム・ルネサンス文学を分析する必要があると考えた。前近代的な「立派さ」(respectability)を求め中産階級的な価値観が黒人の性的表現を特徴付けているとする Candice Jenkins による先行研究等を踏まえつつ、20 世紀前半のアメリカ社会において非常な影響力を持った友愛結婚、優生学、社会衛生運動を理解するためには、近代的規範である「正常さ」(normality)の概念を持ち込む必要があったのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ハーレム・ルネサンス期の小説における黒人女性のセクシュアリティの表象を歴史的な背景を参照しながら分析することで、性規範の近代化と黒人文学の関連性を明らかにすることである。近代において発展した性的な正常さ規範の表れである友愛結婚、優生学、社会衛生運動という三つの歴史的視点から文学作品を解釈することを通して、人種差別が合法であった時代のアメリカにおける黒人作家たちによる文学的抵抗の様相、また黒人社会内部における女性や労働者階級の立場の弱さ/無防備さ (vulnerability) についてもつまびらかにする。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、おもに以下の 4 つのアプローチを取った。

- a) 友愛結婚、優生学、社会衛生運動の底流にある性的正常さのイデオロギーを把握する。Havelock Ellis や Otto Weininger といった生化学者の著作を参照し、性的正常さのイデオロギーの系譜を辿る。米国における性の近代化の歴史を Christina Simons, *Making Marriage Modern: Women's Sexuality from the Progressive Era to World War II* (New York: Oxford UP, 2009) を土台としつつ、Lennard Davis の *Enforcing Normalcy: Disability, Deafness, and the Body* (New York: Verso, 1995) や Julian Carter の *The Heart of Whiteness: Normal Sexuality and Race in America, 1880-1940* (Durham, Duke UP, 2007) といった normality 研究を参照する。
- b) 社会衛生運動での都市部での売春取り締まり活動が黒人コミュニティに及ぼした影響についてのアーカイブ調査をする。Crisis, Opportunity, Messenger のように黒人中産階級のあいだで読まれていた意見雑誌、また Pittsburg Courier, New York Amsterdam News といった黒人社会に広く流通していた新聞を扱い、社会衛生運動が黒人コミュニティに及ぼした影響を把握する。とりわけ、ハーレム内外の幅広い黒人読者に読まれ 1940 年代には発行数 10 万部に達していた『アムステルダム・ニューズ』紙はゴシップ紙の役割も果たしていたと言われており、当時の黒人大衆の関心を知る上で欠かせないリソースである。また 20 世紀前半のアメリカにおいて爆発的な人気を博した結婚マニュアル *Ideal Marriage* や *Happiness in Marriage* および *Growing Up: How We Become Alive, Are Born and Grow* などの性教育読本、避妊推進者であった医師 Margaret Sanger が編集していた *Birth Control Review* および避妊法を記載したパンフレットなども参照する。また社会衛生運動の中心的人物であった Isabel Davenport などの白人改革者や Franklin Nichols などの黒人改革者の著作を読み直し、改革者側の主張を整理する。国内で閲覧できない資料が多いため、アーカイブ調査はオンラインのほかニューヨーク市ハーレムに所在する The Schomburg Center for Research in Black Culture で行った。
- c) 広範囲の黒人文学作品を精読する。Nella Larsen, Zora Neale Hurston, W.E.B. Du Bois, Wallace Thurman を中心としたハーレム・ルネサンス期の著作を扱った。ただし「研究成果」欄に記載の通り、ラーセンについて研究を進めるにしたがって公民権運動期以降に活躍している Toni Morrison や Audre Lorde にも関心が広がった。
- d) 理論的な補強を行う。
『性の歴史—知への意志』(1976 年; 渡辺守章訳、新潮社、1986 年)をはじめとするミシェル・フーコー Michel Foucault の著作のほか、セクシュアリティ研究におけるフーコー考古学の重要性を説いた David Halperin の *Saint Foucault: toward a Gay Hagiography* (Cambridge: Harvard UP, 1995)、セクシュアリティを情動の観点から捉え直す Lauren Berlant やクィア・オブ・カラール批評の枠組みを用いて女性の非規範的な快楽の系譜を構築する Maria Juana Rodriguez、などを参考にした。また研究期間後半は身体的経験としてのセクシュアリティという概念に関心が移ったため、生物学的な身体を考慮に入れたフェミニズム理論の必要を訴える

Elizabeth A. Wilson の *Psychosomatic: Feminism and the Neurological Body* (Duke University Press, 2004 年) および *Gut Feminism* (Duke University Press, 2015 年) や、ダーウィンの進化論における性的な選択の概念の重要性を強調する Elizabeth Grosz の *Becoming Undone: Darwinian Reflections on Life, Politics, and Art* (Duke University Press, 2011 年) などを参照し、生物学的な現実としての身体に注意を払いつつ本質主義に陥らない形で異性間の親密性を理論化する可能性について追究した。またトラウマ臨床研究を牽引する Bessel van der Kolk の *The Body Keeps the Score* などから近年の精神医学の知見を学んだ。

4. 研究成果

本研究課題は 1920~30 年代のハーレム・ルネサンスと呼ばれる時代の黒人文学を対象として出発した。友愛結婚、優生学、社会衛生運動などに表れる当時の性規範に作家たちがどのように抵抗していたかという視点から作品の分析を行い、16 年度に論文“Her Self in the Making: Female Promiscuity in Wallace Thurman’s *The Blacker the Berry*”を公表することができた。サーマンはハーレム・ルネサンスの比較的若い世代の間で中心的な存在だったにもかかわらず、日本国内では認知度がきわめて低いため、*The Journal of the American Literature Society of Japan* に論文を掲載することができた意義は大きいと考える。

さらに、同時期の代表的作家であるネラ・ラーセンについて研究を進めるにしたがって、現在活躍しているトニ・モリスンがラーセンの作品から創作のインスピレーションを得たのではないかという可能性に思い至った。モリスンの初期の傑作 *Sula* とラーセンの代表作 *Passing* は共通して、二人の女性の間での親愛の情の可能性と困難を描いており、プロットにも共通点が見られるのである。17、18 年度にプリンストン大学図書館に所蔵されているモリスンの原稿を閲覧することができ、モリスンがラーセンを意識して *Sula* を執筆したことをほのめかすような資料を入手することもできた。こうした発見に助けられ、本格的に二作品の比較検討を行った結果、ラーセンに比してモリスンにおいて身体の描写がより詳細になされていることの重要性を意識するようになった。18 年度に発表した論文「身体に根ざしたエロティックな力—ネラ・ラーセン『パッシング』からトニ・モリスン『スーラ』へ」はその成果である。

両作品を分析するにあたっては、黒人レズビアン・フェミニスト詩人オードリー・ロードの思想や、近年のクィア理論(とりわけ生物学の可能性に関する研究)さらには臨床精神医学や心理学の知見を参照した。その結果、モリスンをはじめとする観察眼、表現力ともに優れた作家たちが身体感覚をどのように描いて来たかという問題に関心を抱くようになった。こうして本研究は、19 年度採択課題「公民権運動以降のアフリカ系アフリカ文学における身体的経験としての痛みと親密性」へと至る流れを用意した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

Chiaki Ishikawa, “Her Self in the Making: Female Promiscuity in Wallace Thurman’s *The Blacker the Berry*,” *The Journal of American Literature Society of Japan*, 日本アメリカ文学会, pp.25-42, 2017 年

〔学会発表〕(計 1 件)

石川千暁、「トニ・モリスン『スーラ』におけるエロティックな身体」、立教英米文学会(招待講演)、2018 年

〔図書〕(計 1 件)

中央大学人文科学研究部編、中央大学出版部、『読むことのクィア 続・愛の技法』2019 年、222 頁(第三章「身体に根ざしたエロティックな力—ネラ・ラーセン『パッシング』からトニ・モリスン『スーラ』へ」pp. 51-71 を担当)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。